

## 若きヴェルテルの悩み

成瀬無極

—

今でもさうらしいがその頃の高等學校の生徒は誰でも大概一度は「ヴェルテル」を通讀したものである。名は忘れたがある文士がその隨筆の中に伊豆の海邊で「ヴェルテル」を繙いて熱い涙を流したといふやうな事を書いた。さういふ文がまた青年の心に強い刺戟を與へた。近頃十數年前に愛讀して到る處にアンダーラインしたレクラム版の「ヴェルテル」を取り出してみると當時の事がさまざまに思ひ出された。一冊のレクラムもそこに假初に引いた一劃の鉛筆の痕も自分の生長のプロセスを語ると思へば貴い。最早單に「白さが上の黒さもの」では無く、そこには自分の若い生命が潜んでゐるのである。

「ファウスト」のやうな書物は幾度も幾度も繰返へして讀むべきもので、こちらの思想

感情の大小深淺に依て、丁度巨鐘が撞く者の方に應じて無數の異つた響きを發するやうに、無限の意義を生じて來るといふことは一般に認められた事實であるが、ヴェルテルのやうに青年の心理を描いたものは特に青年に愛讀せられるのは自然である。けれどもまた青年ばかりが讀むべき書だとするのは誤まつてゐる。圓熟した思想感情の前には存立し得ないやうな幼稚な作とは全然選を異にしてゐる。永く青年の心を失はぬ人、自己の青春を振り返つて見やうとする人、現在の青年の心を理解しやうと思ふ人、一般に物心の生長、發達、成熟の痕に思を潜めて人生の歸趣を洞察しやうとする人は必ず屢々繙讀すべき書物である。ナポレオンは陣中へ之を携へて再三精讀したといふ。ゲーテ自身も折々之を繙いて自己の進化の道筋を眺めたのである。彼は廣く自然界を觀察し、植物の變形の痕を討ねて宇宙進化の大理法を感得した人である。獨り自己の精神こころの歴史の研究を忽にする筈はない。さて、私が今「ヴェルテル」を繙くのは果してどの意味に於て、あらうか。私自身あまりこの點は考へてゐない。けれども私は青年の心を永く失ふまいとするものであり、また平常青年に接してゐるので、その心を理解しやうと欲するものであり、そしてまた年齢の上から云つて今や青年期から漸々離れやうとする私なのであるから、少くともそこに回

願追憶の情の交つて來ることは否認することが出來ないであらう。

二

高等學校時代にアンダーラインした處を見ると、それは主にヴェルテルが悲しい戀に惱み悶える處で、感傷的の文字に富んだ個所である。例へば九月十日の手紙には半分以上も朱線が引いてある。時は秋である。「處は思ひ出の庭園である。段丘テラスの上の高い栗樹カスダエの下に立つて落日に寂しい思ひを寄せてゐると、いつか日は全く没して月が上つて來る。そこへロッセがアルベルトと一緒に近づいて來る。冴えた月の光に魅せられたやうになつてしばらく皆無言である。やゝあつてロッセが云ふには、月の光を浴びて逍遙するといつても死んだ人のことを思ひ出す、それから死とか未來とかを考へる。來世といふものは在るには違ひないが、然し吾々は再會するだらうか、相互に認め合ふだらうか、ヴェルテルの考へがきゝたいといふのである。永久にロッセから離れやうと決心して最後の告別に來たヴェルテルはロッセに手を差し出しながら、會ひますとも、この世でもあの世でも！と辛うじて云ふが、胸が迫つて後の言葉が出ない。眼は涙で一杯になる。それからロッセが亡き母の追懷を語る。最後に、では

左様なら、またお目にかゝりませう」とヴェルテルが云ふのを、ロッテが引き取つて明日あしたと戯談交りに答へる。この言葉がヴェルテルの心を深く動かす。二人が並木道を月に照らされながら出て行くのを見送つて大地に伏して男泣きに泣く。——こゝは幾度も繰返へして讀んだものである。黙つて讀んではゐられなくなつて聲を出して讀んだ。ある時はその聲が曇つて慄へたこともある。それから二人してオシアンを讀んでゐるうちに感情を制し切れなくなつて最初のそして最後の抱擁をするあたり、吾々三人の内一人は去らなければならぬ。その一人に私はならうと思ふといふ最後の手紙、それからもつとあま甘い感情を語つてゐるところでは、ロッテの唇に接吻し、ロッテの口から養つて貰ふ金カナ絲雀リヤを見て思はず顔を背そむ反けるといふ條くだりなどに線が引いてある。

今の私に興味のあるものはさういふ感傷的の方面よりも寧も一般にあの頃の青年の心に起つた動搖と新思想の醗酵とにある。一言すればシッルム・ウン・ト・ドラング期の反映として見るときに、ヴェルテルは一層深い意義を有つて來るのである。

この見地からすると先づ氣が付くのは、自然に歸れといふルソーの思想が全篇に瀟漫してゐることである。常識主義形式主義に反抗して赤裸の人間性に立脚しや

うといふ欲求と努力が到處に現はれてゐる。

第一に「自然の愛」が、著しく描かれてゐる。これはゲエテの一大特色であつて、一方には幾多の不朽な抒情詩となり、一方には價值ある自然科学的研究となつて傳はつてゐる。萬象の中に汎く神を見るといふ自然即神靈の宗教觀も茲に根ざしてゐるのである。自然の愛は抒情詩の外に「ファウスト」第一卷などにも屢々現はれてゐて、煩はしい世の營みを逃れて自然の懷に抱かれ、自然と融合したいといふ願ひはどんな境遇の下にも詩人の心から離れなかつたものと見える。彼の旅行癖も登山熱もここから來てゐる。ヴェルテルの第一信の冒頭にも、離れ難く思つてゐた友から別れて來てしかもかく心樂むとは何といふ人の心であらうと自ら怪んでゐる。五月十日の條には、春の野や森や谷を眺めてゐると不思議な怡樂が胸に充ち溢れて自分の藝術はそのために壓倒せられてしまふ、今のところ一線も引けないが然もこの瞬間ほど偉大な畫家であつたことは曾て無いと書き、またこの心に充ちて温かく生きてゐるものをさながら紙上に寫し出すことが出來たらどんなに嬉しからう、それは汝の心の鏡であり、汝の心はまた神の鏡であるやうに云々と自然を讚美してゐる。大空は戀人の姿のやうに我が魂の中にさながら休むとも書いてゐる。自然は實にヴェルテ

ルの戀人であつた。彼は自然のやうにロッテを愛し、ロッテを愛するやうに自然を愛した。遺書にもかういふ一節がある――

「この眼を開くもさらばこれを限りなり。もはや日の光を見ることあるべからず。灰色の曇り日永く蔽ひ包まん。いで、自然も愁嘆け！汝が子、汝が友、汝が戀人は今その最後に近づくなり。」

ゲエテは單に自然を眺め、味ひ、樂んだ人では無く、自然と共に、自然の中に生きて呼吸した人である。自然と融合して一體となつた人である。

自然の愛は一方に屢々人間社會の回避を豫想するので、消極的態度として之を排斥する人々もあるが然しゲエテの如き人にとつては自然はその無限の創造力の源泉であり、身心の最も滋味に富んだ營養であつた。幼年の時に人は自然と一體になつてゐる。少年の時に之と馴れ親んでゐる。青年期になつて、漸く客觀的に之を觀察するやうになる。そして意識的に自然から深い影響を受け入れる。そして屢々その美に憧がれ、酔ひ、耽つて之を讚美し、渴仰するやうになる。自然の中に神性を認めて跪拜するやうになるのは青年期に於ける感情生活の最も著しい特色の一つである。自然に對する感情の清新フレッシュネスを永く失はないのは嬰兒こどもの心を永く失はないこ

とを意味する。この世界は果して「大人オトコ」ばかりの世界であらうか。文明とは自然の征服を意味するのであらうか。シルレルはこの関係を長詩「散歩」の中に歌つてゐる。

### 三

自然の愛に關聯して著しく現はれてゐるのは小兒に對する愛情である。天真流露の小兒の動作は常にヴェルテルの心を牽き、小兒はまた直覺的にその愛を感じて彼を慕ひ彼から離れない。ヴェルテルは自らかう語つてゐる――

「この地上で私の心に一番近いものは小兒だ。彼等の顔を眺め、かういふ微小なものの中に他日必要な凡ての長處、凡ての力が芽を出してゐるのを認め、子供らしい片意地の中に未來の堅固な性格を見、我儘の中に世の危険をさり氣無く切り抜ける快活な輕捷な氣分を見ると、しかもそれ等が凡て少しも損はれずに完全無缺に存在するのを見ると、いつも、私は人間の師と仰ぐべき方の言葉を繰返へす、それは「爾曹嬰兒の若くならずば」といふ貴い言葉である。」

瀕死のヴェルテルの傍で最も烈しく泣き悲んだのは平生馴れ親んでゐたロッテの小さい弟達である。彼等はヴェルテルの手や口に接吻し、中にも彼が最も愛してゐた一

番上の男の兒はいつまでも彼の唇から離れやうとせず、彼が絶息した後で人々が無理に引き離した。子供達は父と一緒にこの不幸な青年の深夜の密葬に加はつた。小兒に對する愛がヴェルテルの性格の一面を語つてゐるやうにイブセンの描いたノラが自分の子供達と嬉遊する無邪氣な態度は彼女の性格をよく現はしてゐる。

自然を愛するものが自然美の最も重大な要素なる樹木を愛するは怪むに足りない。樹木の生死—萌芽、生長、開花、結實等の變化、花から青葉になる迄の微妙な移り變り、柔い新緑の色が漸々濃く強い色に變はつてゆき、やがて露霜に飽いて赤に黄に茶に二度の春を飾るかと思えるのも時の間、やう／＼枯れ萎み、秋風にかさこそと散り失せて、裸の枝は木枯に身を震はし、冷たい雪を戴いて縮みかじけてしまふが、その雪の溶ける時分にはいつしか微かな微かな緑の芽が慎ましげに其處此處から小さい頭を出じてゐる。かういふ黙々の中に行はれる自然の推移の痕に誰か心を驚かさぬ者があらう。自然を愛する者は深夜樹木の呼吸を聞くやうにすら感じ、その葉擦れの音に自然の囁きを聽かうとさへするであらう。ヴェルテルの戀にとつて意味深い幾株かの胡桃の樹があつた。教會の開祖の植ゑたものと傳へられてゐた。その涼しい蔭で彼と牧師とロッテと三人して語つたこともある。この由緒ある老木が



心無い人々の手に懸つて切り倒されたときいたとき彼は憤懣の餘り狂するばかりになつた。「最初の刃を加へた犬奴を殺してやりたい」といふやうな彼に似合はない思ひ切つた劇しい呪ひの言葉を吐いてゐる。そして同時に、學者振つて基督教の倫理的批評的革新を企てつゝあると云ふ冷酷な牧師夫人を罵つてゐる。

熱烈で高潔な情操を尙ぶ彼が金銭や名譽を輕視するのも容易に了解せられる。彼は他人のために、物質のために、自分の好まない求めない事に盡瘁する人間を愚人と呼んでゐる。

#### 四

「自然に歸れ」といふ叫びはやがてまた自由平等を求めめる聲である。青年は自己を中心とし權威としやうと欲して他の一切の權威を無視し又は進で之を倒さうとする傾向がある。革命的精神が横溢してゐる。「新らしき酒を舊き革囊に盛る者はあらじ」といふのが彼等の標語である。人爲的の形式を打破して新らしい眞精神を發揮しやうと逸<sup>はよ</sup>り、餘り躁急に過ぎて半途で斃れることも稀では無い。ヴェルテルも亦かういふ「天才時代の犠牲であつた。ヴェルテルを書いたゲーテはしかしこの危険な

奔流を通り抜けて廣い藝術の太洋に浮び出たのである。彼の若い友の幾人かは中途で力盡きて難破した。さういふ人々は恰も自分の屍で天才ゲエテのために道を造つてやつたやうな觀がある。

實生活に於ても藝術に於ても因襲的の形式を打破しやうといふのがその頃の青年の目的であつた。階級や煩瑣な規則、習慣禮法等に對する反感は「ヴェルテル」の中に屢々現はれてゐる。

「身分のある輩は平民に近づくと威嚴を損ずるとでも思ふのか冷かに距離を保つ中にはまた悪い道化者であつてわざと平民的に出て却てその傲慢を一層甚だしく憐れな人々に感ぜしめる……成程吾々は平等では無く、また平等であり得ないことは自分もよく知つてゐる。然し尊敬を維持するために所謂賤民から遠ざかる必要があると思ふ人間は負けるのを恐れて敵から隠れる臆病者と同様に非難を免かれない。」

「規則の利益を喋々するのは市民生活を讃めるのと同様の立場から出るのだ。規則を遵奉する者は決してつまらぬものや拙いものは作らないだらう、法律と善良な習慣とを守る者が決して始末にゆかぬ隣人とならず、また珍らしい惡漢にな

かえないやうに。その代りまた凡ての規則はたとひ人が何と云はうとも自然の感情とその眞の表現とを破壊するものである！

また活きた「自然」に對して「書物」を死物と見てゐるやうなところもある。ホメール一卷を懷中にして自然の間に逍遙するのがヴェルテルの最も幸福と感ずるところであつた。友人が書物を送らうと云つてきたのに對して、「どうぞ止めて呉れ、この躍り狂ふ胸の中だけで十分ではないか、書物に依て刺戟を求めする必要がどこにあらう」と云ひ、また或人を評して、「あの人は惜しいことに往々唯聞いたり讀んだりした事柄を口にする。しかもそれが他人の立脚地から出てゐるのだ」といふ意味の事を述べてゐる。これ等も皆傳習を卑み獨創を尊ぶ精神の發現に外ならない。

殊に禮式といふやうなものにのみ齷齪し、位階とか勳章とかいふものにはばかり憧がれる人間を罵倒してゐる。伯爵家に招かれて圖らずも貴族の集會に列し、結局紳士や貴婦人連の物議を醸して退席を要求せられ、その事が人の口に上り、平生から出過ぎた生意氣な青二才だからさういふ目に逢ふのだ、態マツを見ろと蔭口をきかれてゐると知つたとき若い彼の憤怒は絶頂に達した。

「誰かそれを面と向つて云ふ奴があればいい、さうすれば刀をそ奴の腹へ突込んで

やるのに。血を見たら少しは落ち着くだらう。あゝ私はこの苦しい胸を休めるために幾度小刀を手にしたか分らない。優れた馬は恐ろしく興奮した場合には本能的に或脈管を噛み切つて氣を靜めるさうだが、私も時々そんな氣持になる。

私も脈を切開して永久の自由がえたい。

貴族に對する反感は一面平民に對する同情となつて現はれる。ヴェルテルは泉に汲む下婢を扶けて水桶を頭に載せてやつたり、不幸な若い百姓の身の上に深い同情を表したり、犯人と問答したりする。この百姓の挿話はヴェルテルの運命に關んで巧みに用ゐられてゐる。或寡婦に命までもと戀してゐたのが引き離され振り棄てられて、正直一圖のその若者は、どんな男にもあの女は有たせない、あの女にはどんな男も有たせない」と云つて女の新しい情夫を殺してしまふ。ヴェルテルは非常に興奮し且同情して裁判官のところへ馳せつけ、寛大の處置を求めたが固より聽れないので大に憤慨する。そして最後に老裁判官が云ひ放つた「いや、彼は救はれない！」といふ言葉に強く胸を撲たれて、不幸なる者よ、汝は救はれない！吾々は救はれないのだ！」と紙片に書き付けた。この法律の權威を輕視するところはトルストイの「人間には人間を審く權利は無い」といふ言葉や、イブセンがノラに云はせた「そんな法律は悪い

法律です」といふ意味の言葉を想ひ出させる。

一般に俗人フイリステルツーム氣質に對する反感が到る處に認められる。ひたすら常識とか理智とか法則とか習慣とかいふものを重んじて人性の本然の聲を抑へやうとするのが所謂俗人氣質で、これが世の中の良い萌芽を萎縮させ、自由の精神を窒息させるのである。アルベルトの好紳士たることを認めつゝも——正義の觀念から特に私心を去つて彼の長處美點を認めやうと努力しつゝも——感情の上でどうしても彼と融和しがたいのは、ロッテの夫であるといふ事實ばかりで無く、この俗人氣質が彼等の間に深い溝渠を掘つてゐるからである。アルベルトの面目はヴェルテルと自殺論を闘はして「Paradox — sehr paradox」と相手の論を駁するあたりに躍如としてゐる。詩人と俗人とは水と油とのやうに永久に調和しがたいのである。

「自己を以て他人を律しやうとすることの愚なるは日々認めてゐる。また私は自分の事に忙しい、この胸は嵐のやうに荒れ狂つてゐるから、他人には勝手に彼等の道を行かせたいのだ、彼等さへ私に行動の自由を與へるのなら！」

世間の實際の或は假想の蒼蠅い干渉を刺戟し興奮させ激昂させた上に失戀の深い痛手を負うて彼は終に起つことが出来なくなつたのである。

この外なほハイネの詩などに最も屢々現はれる所謂生の惱み(Weltschmerz)が常にヴェルテルの心を灰色の霧のやうに裹み、かれの情緒に蒼白い光を投げてゐた。悠久な天地に假初の生を托する憐れな自己の姿、理想と現實、欲求と能力との矛盾から生ずる自己分裂の感を抑へることが出来ない。

「人間はその上で享樂するためには僅少の土地があれば宜い。その下で憩ふためには一層僅で足りるのだ。」

道も無い深山の奥から未知の大洋の涯までも永久的の創造的精神が生きて働いてゐる。禽獸草木皆その生を樂んでゐる。しかも一度眼を轉じてその反面を覗くと、不斷の創造の裏にはまた不休の破壊力が働いてゐるのである。無限の生命の舞臺は忽ち暗黒な墓穴と變つてしまふ。手に執る間も指す間も無く萬象は刹那に過ぎ去り消え失せる。一瞬間毎が汝及汝の周圍の者の破壊者であり、また汝自身が破壊者とならない一瞬間も無い。何氣ない一投足が無數の微蟲の命を價する。勞苦の結果たる蟻の巢は無殘に踏み蹂られ、小さい世界は憐れな墓穴に變つてしまふ。かういふ見方からするも宇宙は永久に吞噬し永久に反嚼する一大怪物と化し了るのである。

## 五

「ヴェルテル」を一口に感傷的主義センチメンタリズムの文學と評し去るのは間違つてゐる。勿論青年殊に詩人肌の青年は多少感傷的たらざるをえない。またセンチメンツの發達しないやうな人間は決して優秀な人間では無い。それが青年期に過度に走る傾向のあるのは寧ろ自然の現象である。感情の流露は青年の美點である。然し全然感情の放縱に委せて意志の統率を缺けば破滅の淵に陥ることを免かれない。シュルム・ウン・ト・ドラング期の若い人々が半途で斃れた原因は皆茲に在る。ヴェルテルが短銃を額に當てたのもこのためである。彼は煩惱の羈絆を斷ち切る意力を缺いた。ゲエテの所謂魔力的デモニッシュ(dämonisch)の情熱に捉へられて自ら滅びたのである。さればヴェルテルの悲劇は一方から見ると運命の悲劇であつて必ずしも性格の悲劇では無い。固より彼の性格も時代の子だけあつて情熱的、感傷的、革命的ではあるが、然し今日云ふ意味で頹廢的デカダンでは無い。多くの健全な清新な素朴な純眞な分子を含んでゐる。先きに述べた「自然の愛」の如きもその一である。また多少自己分裂の悲痛を味はつてはゐるが、一方に自己の品性、能力を信じて飽迄自己を主張する勇氣に充ちてゐる。從

て一方に自己穿鑿猜忌嫉妬等の暗黒な性質を餘り持つてゐない。彼には元來盡きない、打ち破りがたい、何に出逢つてもめげない、獨逸語に所謂 *unverwundlich* のユーモアがあつたやうに見える。少くともその萌芽があつたに相違ない。このユーモアのために彼はその悲惨な運命から救はれたかも知れないのである、恰もゲーテ自身がそこから脱却しえたやうに。この點に就てはヴェルテルが「不機嫌」(*Üble Laune*)に關して論じてゐるところを見るとわかる。

彼に従へば不機嫌は一の惡徳(*Taster*)である。自他を同時に毀損するものであるから惡徳と云つて差支へ無い。彼はまた之を人間に於ける最も憎むべき罪惡(*Sünde*)だとさへ呼んでゐる。殊に、凡ての歡樂を自由に享け容れ得可き若盛りの人間が千金にも換へ難い短かい青春の日を互に澁面を作つて過ごすのは最も腹立たしいことで、後になつて始めて自分の愚かしい浪費に氣が付いても最早遅いのである。

「吾々人間は佳日は少なく惡日は多いと訴へるが、思ふに不當な場合が多い。若し吾々が心を豁いて神が日々授け給ふ好きものを味はうとしたならば萬一禍の來たとき之に堪へうるだけの力を十分持つたにちがひない。」

不機嫌は一種の病氣である。また怠惰のやうなものである。固より稟性にも依る



が意志の力で之を抑制すれば治癒することが出来る。怠け者が一度發奮してみると活動の中に眞の快樂を見出すやうなものである。誰でも好んで不機嫌であるものは無いのだから各人宜しくその抑制に努力すべきである。

「吾々が互に幸福にしあふことが出来ないもので十分では無いか。たまに感じうる快樂までも互に奪ひ合ふ必要があるだらうか。そしてまた自分の不機嫌を隠して周囲の人々の喜びを損はないやうにすることが出来る人が幾人ゐるだらう。

不機嫌といふのは寧ろ吾々自身の無價値に對する内的不滿では無からうか。一種の愚な虚榮心に驅られた、嫉妬と常に結び付いてゐる自己嫌厭ではあるまいか。吾々が幸福にしてやらない幸福な人間を見るのに堪へないのだ。ある心から湧き出る單純な歡びを、その心を支配する自己の暴力で奪ひ取らうとする者は禍なかな。この世のあらゆる贈物を以てしても、どんな種類の樂みを以てしても、一旦吾々の暴君の嫉妬的不快に依て苦にがくされた自己快感をたとひ一瞬間でも償ふことは出来ない。」

かう熱心に論じ來つてヴェルテルの眼には涙が溢れた。過去の様々の追憶が胸に迫つたのである。之に依てみても彼が徒らに沈鬱に耽り多感を街ふ軟弱な青年で無

かつたことが分る。不機嫌は一の頹廢的傾向である。そしてそれが他人の前に現はれるときには多くの場合自制力の缺乏を意味する。世間に出て快活な人間が往々自宅では極めて陰鬱で怒り易いのは一種の我儘から出てゐる。不機嫌を自己の内部から全く驅逐し去るのは随分困難であらう。力の自覺と純潔の意識とが無くてはならない。不機嫌を人の前に包むのは多少の努力である程度まで出來得ることである。これは偽善虚飾を求めものでは無い。他人の心に對する微妙な顧慮(die Rücksicht)を要求するのである。感情の自由を尙ぶ青年には殊にこの邊の思慮が肝要である。ヴェルテル自身も強い大きいユーモアで一貫する力を缺いた。それで斃れた。ゲエテはその力を持つてゐた。ゲエテの藝術には一面に厭世主義を含み然も之を容れて餘りある大きい深い樂天主義が流れてゐる。この流れはホメールにも沙翁にも共通である。「ヴェルテル」を書いて「ヴェルテル」から解脱し得たゲエテはやはり大きい。

なほ、ヴェルテルの思想感情が頹廢的乃至虚無的のそれと異つてゐるのは、彼の自由平等が必ずしも極端なものでないことや「尤も」(Sogar)といふ妥協的な言葉を憎み、全か無かの態度を取りつゝも徒らに感情の奔放に任せず一方に理智の十分に發達して

ゐることや善惡賢愚を識別する標準を疑ひつゝも強い道義的本能を持つてゐることや、放浪的生活に憧れつゝも家族的生活の温味を忘れ兼ねてゐるところなどに依て之を知ることができる。

「かく最も落つかない放浪者<sup>ワザガン</sup>も結局祖國に憧がれ、自分の茅屋の中に、妻の胸に、子等群の中に、家族を養ふ勤勞に於て彼等が廣い世界で求めて得なかつた歡樂を見出すのである。」

ゲエテの結婚觀、夫婦觀、家庭生活に就て考へるとこの邊の消息が明らかになる。さて最後に一言したいのは彼の否ヴェルテルの女性觀である。「永久の女性」(das ewig Weibliche)に對する愛と崇拜とは遺憾無く現はれてゐる。動々もすれば女性を享樂の具と見やうとする近代の頹廢的傾向とは著しい相違である。ゲエテの享樂的態度と近代詩人のそれとを比較する場合に最も注意すべきはこの點でなければならぬ。ヴェルテルのロッテに對する愛はどこまでも敬虔なダンテの愛である。そしてこの崇拜的、渴仰的の愛がいつか情慾的、所有的の愛に變りつゝあるを自覺する毎に彼は自ら戰慄を禁じえない――

「私は自分自身を恐れる！あの人に對する私の愛は最も神聖な最も純潔な友愛で

はなかつたか。罰せらるべき欲望をこの胸に感じたことがあるだらうか——私は誓ひはしまい！——そして——夢といふものは！噫、これほど矛盾を極めた作用を不思議な力に歸せしめた人々の感じは眞實だ！

昨夜！話すさへ身慄が出る、私はあの人をこの腕の中に抱いてゐた……最後の會合のときオシャンの詩の哀調に心を搔き亂されて互に我を忘れて抱擁し、接吻したとき、我に復つたロッテが力無い手でヴェルテルを胸から押し退けながら、最も氣高い感情から出た落ちついた調子で彼の名を呼ぶと、彼はこの純潔な貞淑な聲の威力に抵抗することができずに思はず彼女を離し、物狂ほしく彼女の前にひれ伏すのである。

女性、自然神、この三者はヴェルテルにとつて三位一體なのであつた。(六、八、東京にて)